九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

弥生時代中期土器様式の併行関係 : 須玖II式期の九州・瀬戸内

中園, 聡

https://doi.org/10.15017/1904664

出版情報：史淵. 133, pp.33-53, 1996-02-29. 九州大学文学部
バージョン：
権利関係：

弥生時代中期土器様式の併行関係

― 須玖II式期の九州・瀬戸内 ―

中園　聡

I　はじめに

筆者はこれまで折にふれて，九州各地の中期土器の併行関係や，九州と瀬戸内系土器との併行関係について，問題点と修正案を示してきた［中園，1985；1990；1993他］．その主旨は，地域別に編年を整理して共伴例を検討した結果，①九州各地の中期土器様式の併行関係に関する優勢な説は，共伴関係による十分な実証がなされないまま特定の考え方の枠組みによって説明されたものであり，大きく変更がせまられること，その結果とあわせて，②近年例が増してきた瀬戸内系土器との共伴例からも西日本の中期土器の併行関係に関する優勢な考えに若干の修正が必要なこと――である．

九州内での関係にしても九州と瀬戸内地域との関係にしても，とりわけ議論が集中するのは中期後半段階である．それは，この時期に併行関係にズレが生じている可能性があることに加え，この前後は西日本一帯で様々な現象で画期がみられ，西日本の弥生時代社会を評価する上で鍵ともいえる時期だからである．また，併行関係をより適切に把握することで，より適切に西日本の弥生時代社会の像を浮き上がらせることができると期待されているからでもあろう．

そのためにも，既存の考えからくる先入観をなくすようつとめながら，具体的資料に即した併行関係の再検討がいま必要なのである．

以下ではとくに断らない限り，たんに「第○様式」という場合は瀬戸内・近畿の様式をさす．

II　各地の編年の現状と問題点

II．1　九州の中期土器編年

九州の弥生土器の編年研究は周知のように長い歴史があるが，総合的な研究としては，完成度や後続する研究への影響力の強さからみても森貞次郎[1966]によるものが一時期を画するといえよう．その後，対立する学説を比較的平等に扱いながら学史的整理を含む解説を行った小田富士雄［1973（1983に所収）］や橋口達也［1979］の論述があるが，1980年代以降飛躍的に増大した資料を用いた九州の弥生土器の総合的な編年研究は行われないまま今日に至っている．森らの記述に独特なのは，北部九州から「周辺」地域への「伝播」をその主たる説明概念として用いており，要素の伝播にかなりの時間を見込む「遅れて伝播」式ともいうべき立場がとられていることである．

その一方で，九州の各地域在住の研究者による地域に密着した研究も行われてきた．そして，多くの資料を用いた各地での本格的な編年案は，奇しくも1980年代にはいってから矢継ぎ早に提示された．南部九州は河口貞徳[1981]，中部九州は西健一郎[1983]，東九州は石川悦雄[1983]，北部九州は，片岡宏二[1982]や田崎博之［1985］の研究が比較的早い段階での代表的なものである．それぞれ多少の問題点はあるが，詳細な編年図が提示されており，それ以前のものと比べて批判にたえるものとなっている．こうした研究を可能にしたのも，開発にともなう調査により各地域で個々に検討可能な程度に資料数が増加したことが大きな要因であるが，翻って研究者を各地域内あるいは小地域での研究に向かわせていった．こうした研究においては，地域内での系統関係や序列の整理に終始するものが多く，上で述べたように新しい知見をふまえた九州内の併行関係については十分な再検討は行われていない．

個々の地域での現状と問題点を整理すれば，以下のようになる．

II．1．1　北部九州

北部九州の中期初頭とされる時期には，城ノ越式があるが，須玖式はそれに

後続する著名な様式である．須玖式にふれた研究は枚挙に暇がないが，小田によって，1970年代初頭までの段階で詳細な学史的整理が行われている［小田，ibid.］．城ノ越式に後続するものとして，須玖式は須玖Ⅰ・須玖Ⅱ式に分けて考えられている．

片岡宏二が筑後平野北部の三国丘陵付近の豊富な土器を素材とした中期土器編年案［片岡，1982］を提示するに及んで，新たな局面をむかえた．小地域で単独に編年ができるということが示されたからである．さらに，田崎博之は，1985年に北部九州全域を対象とした須玖式の編年研究を行った［田崎，1985］．この論文は編年の手続きの点で方法的に注目できるものである．これがひとつの契機となって北部九州の弥生土器研究に「型式」や「様式」という概念を普及させるのに一定の貢献をしたからである［中園，1993：pp.801-802］．田崎は，須玖式を「遠賀川以西系」と「遠賀川以東系」に分けた．このあと，武末純一が須玖式の概説を行っている．遠賀川以西地域と以東地域に分けて解説しており，その点では，田崎の見解と同様である．小地域色があることや，他地域との関係が述べられている［武末，1987］．しかし，依然として，須玖式と周辺の関係は不明な点が多い．

本論では，中期を城ノ越式→須玖Ⅰ式→須玖Ⅱ式の3つに大別する．丹塗祭祀器種の存在を須玖Ⅱ式の最もよい指標としうる．なお，須玖Ⅱ式と後期高三潴式との区別については議論がある．片岡［1985］が整理した福岡県夜須町の金山遺跡の土器群の位置づけに象徴されるように，それを中期末すなわち須玖Ⅱ式の新しい段階とみる井上裕弘［1981］・高倉洋彰［1982］・武末純一［1982］と後期初頭とみる柳田康雄［1983；1987］や片岡の意見に分かれている．しかし，丹塗研磨の祭祀器種が豊富で，基本的な器種は甕用の蓋も含めてその前段階と類似することから，様式的にみて須玖Ⅱ式に含めておくべきである．

Ⅱ．1．2　中部九州

遺跡の調査報告などで個別的な検討はあるが，よくまとまったものとしては，西健一郎の編年［西，1983］が唯一のものといえる．この論文で特徴的なのは，黒髪式と呼ばれてきた土器群をすべて中期におさめているということである．

森貞次郎[ibid.]らに代表されるように黒髪式の全部，または一部を後期とみなす考えは伝統的にあったし，また強いものであった[小田，ibid.]．これに対して緒方勉は，中期が空白になるという論理的な根拠と具体的な共伴資料とを提示して，素直に考えれば，「弥生中期的様相をもった黒髪式土器を，弥生後期にまで引き下げる不自然さはなくなろう」[緒方，1978：p.76]とし，中期説を唱えていたが，さほど影響を与えはしなかった．西の編年は実質的にはこのような考えをビジュアルに補強したことになる．

しかし，西の編年以後，黒髪式をめぐる研究では大きな進展がみられない．ただし，最近，清田純一により熊本県城南町宮地丘陵における編年案が提示されており，黒髪式という名称は用いられていないけれども内容的には黒髪式は中期におさめられている[清田，1991]．少なくとも西の編年以後，中期説への明確な反論は出されていない．西編年が発表される以前から現在に至るまで地元の研究者においては実際の運用面で中期説が非常に浸透していることがうかがえるが，公式には黒髪式の位置づけは未確定である．

本論では，上の原式→黒髪Ⅰ式→黒髪Ⅱ式という序列を考えておく．

Ⅱ．1．3　南部九州

南部九州の弥生土器編年は，河口貞徳によって1981年までに一応の完成をみた[河口，1981]．河口をはじめとする見解では，前期の高橋Ⅰ式から後期終末の中津野式まで一貫した系統関係になる．ところが本田道輝は，薩摩半島西半部に所在する松木薗遺跡でえられた資料（松木薗０式）が黒髪式に類似することから，中期後半のこの地域には別系統（黒髪式）の土器が存在していたとし，河口の編年による中期後半の山ノ口式から後期前半松木薗Ⅰ式は直接にはつながらないとする見解を示した[本田，1984]．つまり，中期の段階で黒髪式（松木薗０式）と山ノ口式は地域を異にして存在し，両者の系統は後期にも並存していくというものである．黒髪式が中期後半に分布域を拡大したということになる．河口が明らかにできなかった山ノ口式の後続については，大隅半島を中心として実際に存在することを指摘でき[中園，1986]，「高付式」と命名されている[中村直，1987]．

南部九州の編年でもっとも問題なのは，河口によって中期後半とされてきた山ノ口式をめぐるものである．鹿屋市王子遺跡の調査後，山ノ口式と凹線文や矢羽透しをもつ第IV様式が併行関係にあることが明らかになってきた．次節（II．2）で述べる「調整案」に基づき第IV様式は北部九州の高三潴式，すなわち後期初頭から前葉に併行するとみなされてきたことから，山ノ口式を後期に下ろす考えが再燃してきた[石川，1984]．また，山ノ口式を第IV様式と伴わない中期の段階と，伴う後期の段階に2分できるはずという，いわば折衷案も出され，中村耕治は実践している［中村耕，1986]．

しかし，一方で河口は，山ノ口式の須玖II式との共伴関係をもとに，中期説を主張してゆずらないが，なしくずし的に前2者の考えが普及しつつあるようである．この，山ノ口式をめぐる問題は，瀬戸内地域と九州との併行関係にもかかわる重要な問題である．

II．1．4　日向

日向地方においては，石川悦雄の編年がよくまとまったものである［山中，1983；石川，1984]．石川は南部九州の山ノ口式を後期とみる考えを出しているが，鹿屋市王子遺跡の資料に加えて，宮崎県新富町新田原遺跡6号住居で在地の土器と山ノ口式，瀬戸内系の矢羽透しをもつ凹線文系の高付・壺（第IV様式）が共伴したことを根拠にしている．当然，共伴した在地の土器は後期ということになる．石川はやや柔軟な立場であったが，より明確な形で継承された［長津，1986]．なお，注目されるのは，石川の編年でIII期とされた中期後半の時期が空白になっていることである．資料の不足のためとされているが，中期に該当するとされてきた在地土器を，外来の土器に合わせて後期に下らせたのちに中期が空白になるので，論理上疑問も残る．

II．2　瀬戸内・畿内の様式との併行関係

1977年，高地性集落の総合的研究にあたって，地域間の併行関係のずれが問題になった．これを解消すべく「北九州と畿内の弥生土器編年の調整」が行われた［小田・佐原，1979]．これによれば，結論的には，前期，中期，後期とい

う名称を使うと学史的にずれが出てしまうが，『弥生式土器集成』の各地のⅠ～Ⅴ様式は幸いほぼ併行と認められるので，Ⅰ～Ⅴ期と呼びかえればよい，ということになる．以下，この考えを「調整案」と呼ぶことにする．したがって，北九州第Ⅱ様式の城ノ越式は，畿内・瀬戸内の第Ⅱ様式と，第Ⅲ様式の須玖式は第Ⅲ様式と，第Ⅳ様式の高三潴式（原ノ辻上層式）は第Ⅳ様式とそれぞれ併行ということになる．

これが発表された翌年にあたる1980年度の日本考古学協会大会では，「青銅器の生産」をテーマとしたシンポジウムが行われたが，議論の性質上，九州，近畿，その他の地域の間での併行関係が強く意識されている．岡崎敬は，併行関係についての齟齬が障壁となることを講演で述べ，司会者は「調整案」の内容を示しながら，パネラー間の意志の疎通をはかり混乱を防ごうと努力した．なお，このとき下條信行は若干の異議を唱え，Ⅲ期を須玖という言葉で一括せず細分して記述したほうがよいということを示唆している［日本考古学協会編，1989］．この指摘は以下本論で述べることに関連して注目しておきたい．

ともあれ，その後，『弥生文化の研究』（雄山閣刊），『岩波講座日本考古学』（岩波書店刊）などをはじめとして広域を対象とする記述を必要とする場合にはこの「調整案」が採用されることが多い．1986年に行われた弥生時代の青銅器とその共伴関係をテーマとした研究会でも，年代の統一のために採用されている［第20回研究集会事務局編，1987］．このように，「調整案」は地域間の比較をする際に重要な役割を果たしているのは明らかで，非常によく使われているのが現状である．

いっぽう，豊岡卓之は九州第Ⅲ様式の後半と畿内第Ⅳ様式が重なる公算があることを主張し［豊岡，1985］，のちに多少の留保はとりながらも明確に図示している［豊岡，1989］．下條も「北部九州の中期末は，凹線文土器（畿内第Ⅳ様式）期にぎりぎり併行していると考えている」と表明している［下條，1989］．また，最近，問題の多かった西部瀬戸内の編年を整理・検討した中村友博は，柳井田式との共伴関係等から須玖Ⅱ式の下限が第Ⅳ様式までくだるとしていることは重要な指摘である［中村友，1993］．なお，武末純一は「畿内Ⅳ様式の上

限が須玖II式平行期までさかのぼるか否かは，なお今後の課題として残されている」[武末，1987]として須玖II式と第IV様式との一部が重なる可能性もあるとの含みをもった発言をしている．このように須玖II式と第IV様式との併行関係を大きくみるものからごく一部がふれあう程度とみるものまで差はあるものの，従来の併行関係の案を見直す動きがあることははっきりと見て取れる．しかしながら，上でみたように公式には「調整案」が用いられているのが現状といえる．

III　併行関係の再検討

III．1　前提と方法

九州各地の様式は，隣合う様式間では併行関係の把握は比較的容易である．中でも須玖式の遠賀川以西系として認識されている佐賀・筑後・筑前西部の様式と遠賀川以東系として認識されている筑前東部・豊前地域の様式との間の併行関係は要素の類似性や頻繁な共伴関係からよくわかるようになっている．両様式が須玖式として一括されてきた所以である．筆者は両様式を必ずしも須玖式として一括する必要はないのではないかと考えているが，本論では併行関係の把握を主眼としているので両者を従来どおり須玖式と一括しておく．

ともあれ，そのような意味で須玖式を捉えた場合，須玖式は量の多少を問わなければ北部九州を中心として九州全域に分布しているといえる．須玖式が主体となる分布範囲においては他の様式と排他性が強く，直接の共伴関係がわかる例はほとんどない．北九州市守恒遺跡出土の凹線文系高杯などは貴重な資料だが残念ながら共伴資料との関係が明確ではない．一方，周辺地域には須玖式をはじめ他の様式との共伴が確認できる例がむしろ多い．とりわけ南部九州や日向においては九州各地の土器や瀬戸内系土器の共伴がみられるなど，同時性の把握にあたって恰好の地域といえる［中園，1993］．

西は，黒髪式の独自性を強調してはならず，在地系・折衷系・北部九州系の3つが統合して黒髪式を形成しているということを強調している［西，1983：

p.102]．したがって，一括資料で直接クロスデーティングできる性質のものや，1つの個体における属性レベルでの共存を示すものなど，性質はさまざまあるということになる．また，遺跡においても厳密な共伴とはいいにくいものもあるが，それらを駆使しながら併行関係をおさえることになる．

III．2　個々の事例と考察

III．2．1　北部九州と中部九州

北部九州西半部の筑後平野以南では前期においていわゆる亀ノ甲タイプが主体をなし，下城式が混在する地域もあるが，亀ノ甲タイプの斉一性の高い様相が認められる．各地でそれに後続する北部九州の城ノ越式・中部九州の上の原式・南部九州～日向の入来Ⅰ式の3つの様式は，区別はできるものの，型式学的にみていまだ類似性が高い．これは3者の同時性を示唆していると思われる．

南筑後は北部九州的要素と中部九州的要素とが混在する地域である．福岡県瀬高町の権現塚北遺跡で南筑後ＫⅠｃ式［橋口，1985］とされる中期前半（須玖Ⅰ式併行）とみられる成人用甕棺の墓壙内に切りあって接する小児棺は，い

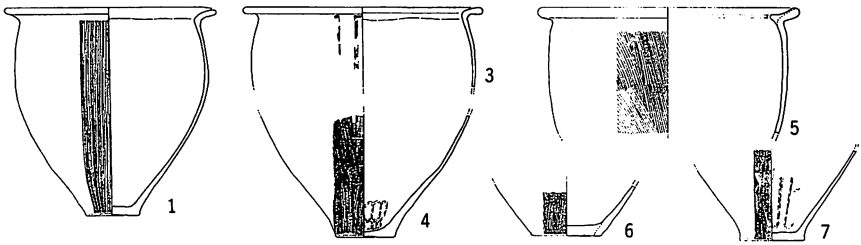

図1　福岡県大道端遺跡Ｂ区3号住居跡　須玖IIと黒髪II新(5)

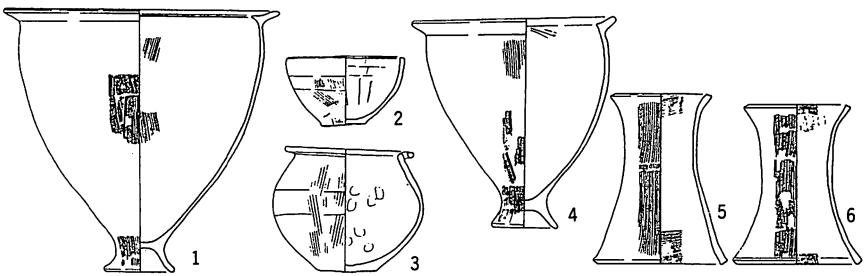

図2　福岡県大江南遺跡　須玖II新(3･5～6)と黒髪II新(1･4)

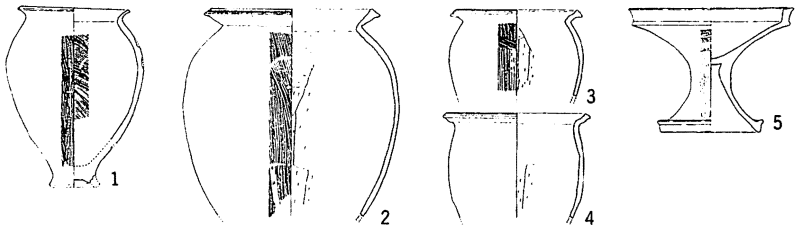

図3　熊本県下堀切遺跡　囲式と第V様式古(2～5)

ずれも黒髪I式に含まれうるものである．切り合い関係からは小児棺が後出するが，北部九州では甕棺に伴う小児棺はほぼ同時期であることが多く，この遺跡では黒髪II式に下るものは認められないことから，須玖I式と黒髪I式の併行関係を示唆している．

同じく瀬高町の大道端遺跡B区3号住居や大江南遺跡竪穴遺構等でも須玖II式（新）と黒髪II式（新）とが共伴している（図1・図2）．大江南遺跡の例は無頸壺がやや新相のきらいもあるが，福岡県夜須町の金山遺跡の資料を中期末として須玖II式に含める見地からすれば，器台は須玖II式新段階にとどめておいてよかろう．したがって，無理に後期に下ろす必要はないと考える．

また黒髪式が主体となる分布域においては，熊本市神水遺跡第3次11号・19号・23号住居跡等で黒髪II式の古段階を中心とする土器に伴って須玖II式古段階に位置づけられる土器が出土している．また，熊本県大津町矢護川日向遺跡20号住居跡等でも同様である．こうしたことから須玖II式と黒髪II式は併行関係にあることが強く示唆されよう．

黒髪II式に後続する段階の土器はとくに名称が定まっていないが，西が後期初頭とした囲貝塚出土土器などがそれにあたろう[西，1983]．これを便宜的に「囲式」と呼んでおこう．熊本県八代市の下堀切遺跡出土土器もこの段階の良好な資料である．なお，この下堀切遺跡では第V様式初頭とみられる山陽系の甕が多く出土し同系の高杯も出土している(図3)．袋状口縁をもつ壺も出土しているが須玖II式からの型式学的な距離から考えても後続するものと考えて差し支えあるまい．また，熊本市神水遺跡でも黒髪式に後続する壺と中部瀬戸内系

かとみられる第V様式でも比較的古い段階のものとがセットになって甕棺として使用されている．黒髪式に後続する土器は特に壺において十分な整理が行われていないので本例は参考にとどめておきたい．

以上から中期後半代についていえば，須玖II式と黒髪II式の存続期間がほぼ一致するといえる．そうであれば，それに直続する囲式がV様式の初頭に併行するので，須玖II式＝黒髪II式＝第IV様式という関係を論理的に導き出せることになる．

III．2．2　南部九州・日向

九州の中期土器様式の併行関係をさらに決定的にするのは南部九州・日向の諸例である．鹿児島県吹上町の入来遺跡西南V字溝では，入来II式と須玖I式および須玖II式（古）の可能性のあるもの，そして黒髪I式が出土している．宮崎県前原北遺跡SC37住居跡では入来II式と肩〜胴部に櫛描波状文を施し口唇部がかすかに凹線状を呈する壺が出土している(図4)．型式的に微妙な点もあるが、第III様式に該当する可能性がある．入来II式＝須玖I式＝第III様式と捉えられれば須玖I式と中山IV式（第III様式）とが併行するという従来の知見[小田，1979]とも矛盾しない．

山ノ口式が入来II式に後続することはこれまでの研究史に照らしてもまったく異論は出ていない．入来II式は日向・大隅・薩摩という広域に分布する様式である．ところが後続する山ノ口式の分布圏は縮小しており，大隅と薩摩半島東部に限られる．すなわち，日向と薩摩半島西部には基本的に存在しなくなるのである．この両地域で入来II式に後続する時期の遺跡がまったく発見されていないとは考えられないことから，入来II式からの直接の系譜がひけないものに転換したと考えたほうが自然である．その有力候補として薩摩半島西部では黒髪式があ

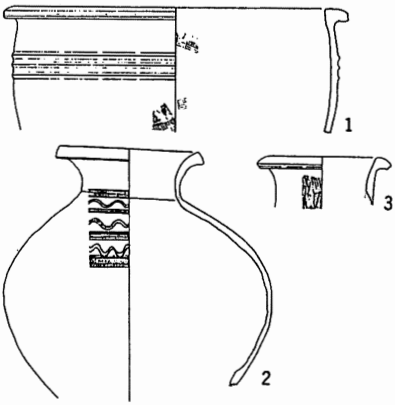

図4　宮崎県前原北遺跡SC37号住居跡
入来II式と第III様式？(2)

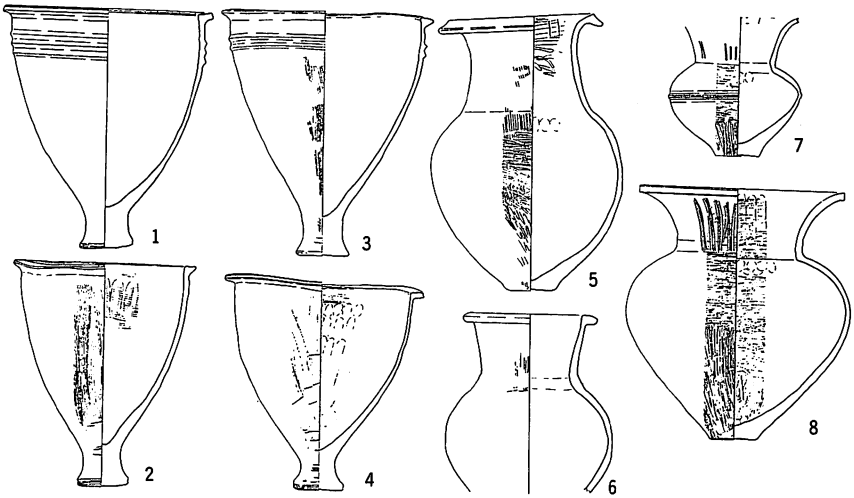

図5　鹿児島県吉ヶ崎遺跡1号住居跡　吉ヶ崎式と須玖II古(7•8)

げられ，日向では中溝式があげられよう．このように論理的に考えることができるが，実際の共伴例もそれを指示する．

山ノ口式の中でも古い段階に位置づけられるものは，鹿児島県串良町の吉ヶ崎遺跡の焼失住居から出土したものがある(図5)．置き捨ての状態であり，土器もほとんど完形である．吉ヶ崎式とも呼ばれているもので，実際には入来II式と一括されることが多い［河口，1981］が，吉ヶ崎タイプが山ノ口式の分布範囲に一致するとみられることや，いわゆる典型的な山ノ口式と非常に類似しておりその直前に位置づけられることが確実視されることなどから，筆者は山ノ口式として一括してその古段階としている．さて，この吉ヶ崎の一括資料の中に須玖II式でも古い段階とみられる大小の広口壺が計3個ある．小型壺は小型のものは外面に「分割暗文」に似た丹彩文が施されている．これらは須玖I式の新しい段階に位置づける研究者もいると思われる資料である．胎土中に軽石らしきものや金雲母を含んでおり，在地製作の可能性が高い．この資料から，山ノ口式の古い段階は須玖II式の古段階に併行するとみられる．

薩摩半島西部に位置する松木薗遺跡の1号住居址では黒髪II式の新しい段階のものが出土しているが，胎土からみて搬入品の可能性のある山ノ口式の新段

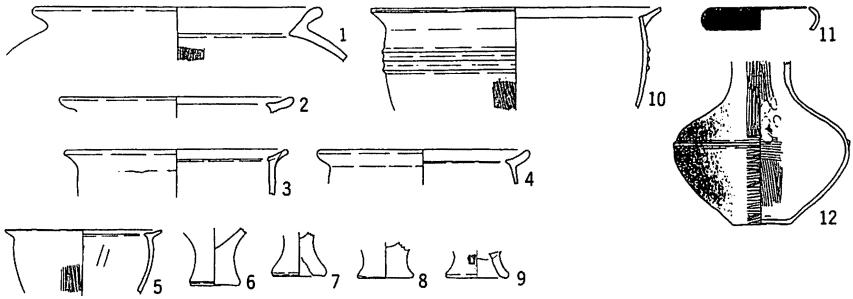

図6　鹿児島県松木薗遺跡1号住居址　黒髪式と山ノ口式(10)と須玖II新(11・12)

階の甕と共伴しており，両者の同時性がうかがえる．また，同じ住居では須玖II式の新段階とみられる袋状口縁の長頸壺がその山ノ口式の甕に押しつぶされたような恰好で出土しており［本田道輝氏の教示］，黒髪II式（新）＝山ノ口式（新）＝須玖II式（新）の併行関係が強く示唆される（図6）．

日向では堂地東遺跡の住居址等でも中溝式に山ノ口式（新）が共伴しており，さらに凹線文や矢羽透しをもつ第IV様式も伴っている．また，小片ながら須玖II式（新）とみられるものも確認できる．鹿児島県国分市の上野原遺跡でも住居跡で山ノ口式（新）に中溝式が共伴している．このように中溝式と山ノ口式（新）は，日向と薩摩双方でクロスデーティングが可能であり，とりわけ日向においては枚挙に暇がないほどである．宮崎県新富町の新田原遺跡の6号住居や4号住居では下城式の系譜をひく甕（下城系甕）や中溝式が出土しており，山ノ口式（新）や凹線文・矢羽透しをもつ第IV様式も共伴している（図7）．さらに，豊後地方との併行関係を知りうるような壺等も出土している．宮崎県国富町上ノ原遺跡では，住居跡で中溝式に第IV様式の高杯が3個伴い，黒髪II式かと思われる小片も伴っている．また，宮崎県東郷町の樋田遺跡の住居跡で下城系甕と中溝式に伴って須玖II式（新）の丹塗甕が出土している．

山ノ口式後期説を再燃させる契機となった鹿児島県鹿屋市王子遺跡の出土土器には，明らかに須玖式といえるものはほとんどないまたは皆無であり，かわりに凹線文や矢羽透しをもつ第IV様式が住居で共伴している（図8）．この遺跡

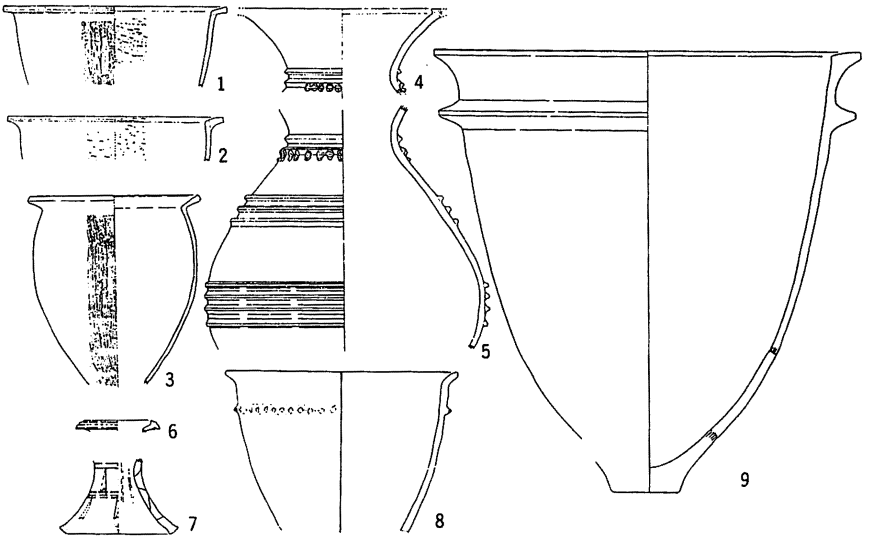

図７　宮崎県新田原遺跡６号住居跡
在地土器（８は中溝式）と須玖II新（３）と山ノ口式（９）と第IV様式(6･7)

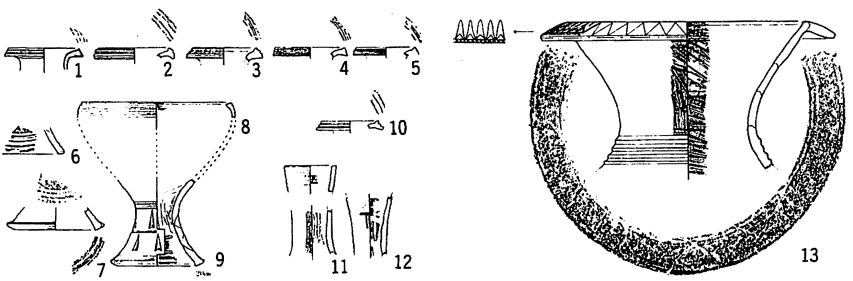

図８　鹿児島県王子遺跡　第IV様式（１～12）と矢羽根透し文を施す山ノ口式壺(13)

は山ノ口式だけの単純遺跡で遺構の切り合いもほとんどない．したがって，住居址以外の包含層から発見された第IV様式土器もすべて山ノ口式に併行する可能性が高い．また，すでに指摘したことがあるが，この遺跡から出土した山ノ口式（新）の壺の肩部や口縁部に第IV様式の矢羽透しを模したことが明らかな細沈線による文様が施されている[中園，1993]．同様な資料は成川遺跡出土の山ノ口式壺にもみられる．鹿児島市一の宮遺跡では一の宮式の出土がみられる

が，一の宮式はかつて考えられていたような山ノ口式に後続する［森，1966］ものではなく，山ノ口式に併行する地域色と考えることができる［河口，1981；中園，1986；1993］．この住居跡で一の宮式に共伴して頸部凹線文をもつ壺が発見されている(図９)．胴部はハケメの上から雑なミガキをかけており部分的にハケメがはっきりと見える．技法的にも色調からも九州でみられるものとは明らかに異なっており，搬入品とみて間違いなかろう．山ノ口式に併行するとみられる一の宮式でも第IV様式との併行関係を確認することができる．以上のように，あらゆる証拠から山ノ口式が第IV様式に併行することは確実である．

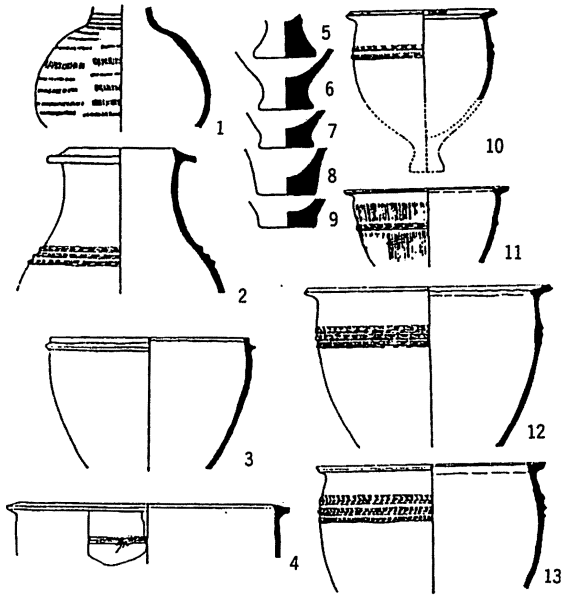

図９　鹿児島県一の宮遺跡
山ノ口式(一の宮式)と第IV様式(１)

しかも，これらは仁伍式に対比できるような第IV様式の新しい段階のものが多く含まれることから，第IV様式と山ノ口式はその存続期間が大きく重複している公算が高い．

そもそも河口が当初から山ノ口式を中期後半に位置づけている根拠としている鹿児島県山川町の成川遺跡での須玖II式（新）の丹塗甕の存在や大根占町山ノ口遺跡で須玖II式（新）の丹塗甕が共伴していることを無視するわけにはいかない．比較的最近では，鹿屋市前畑遺跡でも遺構や包含層で山ノ口式と須玖II式（新）と第IV様式が出土している．さきにあげた松木薗遺跡や樋田遺跡等の例を総合しても山ノ口式（新）は須玖II（新）式と併行していると見なさなければならない．

以上，中溝式と山ノ口式と第IV様式の3者の共伴は繰り返し確認されており，もはや疑う余地はない．まとめれば，須玖II式（新）＝黒髪II式（新）＝山ノ口式（新）＝中溝式＝第IV様式ということになろう．

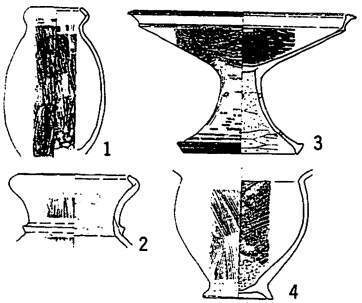

図10　板付遺跡 F5d 区 SD31
高三瀦式古と第V様式古（3）

山ノ口式に直続する高付式は，鹿屋市高付遺跡で多くみられるが，この遺跡では第V様式初頭とみられる資料が多く認められる．また，薩摩半島西部で黒髪II式（松木薗0式）に直続するものは松木薗I式であるが，松木薗遺跡での出土状態からこの資料と第V様式の古段階とは併行にあるとみられ，かつ北部九州の後期初頭にあたる高三瀦式の古い段階の袋状口縁壺も出土しており，これも同様に併行するものである公算が高い．板付遺跡F5d区SD31出土資料は高三瀦式の古い段階のものであり，山陽系の第V様式初頭の高杯が伴っている（図10）．遺構の性格が不明なので厳密な同時性をいうには疑問もあるが，豊岡卓之が自説を披露する際の根拠とした対馬のハナデンボ2号石棺において，後期初頭にあたる高三瀦式の古い段階の壺と第V様式の古段階とみられる高杯が出土していること［豊岡，1985］とあわせて，北部九州における貴重な例といえる．さきに中部九州の下堀切遺跡の例からも，九州においては高三瀦式など確実な後期初頭の土器と第IV様式との明確な共伴例はなく，むしろそれらは第V様式の古段階と共伴例が認められることに注意すべきである．

表1　各地の併行関係と系統関係

	北部九州	中部九州	南部九州		日向	瀬戸内
中期初頭	城ノ越式	上の原式		入来I式		第II様式
	須玖I式	黒髪I式		入来II式		第III様式
	須玖II式	黒髪II式		山ノ口式	中溝式	第IV様式
後期初頭	高三瀦式	（囲式）	松木薗I式	高付式	（＋）	第V様式（古）

付表　九州各地での主要な共伴関係

遺跡・遺構	所在地	城ノ越	須玖I	須玖II古	須玖II新	高三潴古	上の原	黒髪I	黒髪II古	黒髪II新	肥後後初	入来I	入来II	山ノ口古	山ノ口新	高付	松木薗I	中溝	II様式	III様式	IV様式	V様式古	
下稗田I-D区109号貯蔵穴	豊前	○	+																○				
下稗田I-D区199号貯蔵穴	豊前	○																	○				
鹿部東町N-4区第III層	筑前	○	+																	○			[高倉編,1973]
下稗田A区162号貯蔵穴	豊前		○																	○			
中山貝塚	広島市		○																	○			
ハナデンボ2号石棺	対馬					○																○	
板付F5d区SD31	筑前					○																○	
上の原住居群	肥後						○																
高野古閑1号甕棺	肥後						○																
矢護川日向41号住居	肥後							○															
矢護川日向26号住居	肥後							○															
神水第3次11号住居	肥後			○				+	○														[竹田編,1993]
神水第3次19号住居	肥後			○				+	○														[竹田編,1993]
神水第3次23号住居	肥後			○				+	○	+													[竹田編,1993]
神水II 1号住居	肥後			○				+	○	+													[緒方編,1993]
矢護川日向20号住居	肥後			○					○														
深堀甕棺	肥後			○					○														
富の原2号住居	長崎			○						○													
富の原A地点3号甕棺	長崎				○					○													
上の原D-12-1号甕棺	肥後				○						○												
矢護川日向14号住居	肥後				○						○												
矢護川日向37号住居	肥後				○						○												
大道端B区3号住居	南筑後				○						○												
大江南竪穴遺構	南筑後				○						○												
下堀切遺跡	肥後											○										○	
神水9号甕棺	肥後											○										○	[大城編,1986]

遺跡・遺構	所在地	城ノ越	須玖I	須玖II古	須玖II新	高三瀦古	上の原	黒髪I	黒髪II古	黒髪II新	肥後後初	入来I	入来II	山ノ口古	山ノ口新	高付	松木薗I	中溝	II様式	III様式	IV様式	V様式古	
入来U字溝	薩摩											○											[河口,1976]
鐙住居群	日向											○											
入来北東V字溝	薩摩											○	+										[河口,1976]
入来西南V字溝	薩摩		○	+				○					○										[河口,1976]
入来南斜面	薩摩												○										[河口,1976]
前原北 SC37住居	日向												○							?			
前原北 SA53住居	日向												○										
吉ヶ崎1号住居	大隅			○										○									
山ノ口遺跡	大隅				○									+	○								
王子遺跡	大隅													+	○						○		
王子27号住居	大隅														○						○		
一の宮遺跡住居址	薩摩東部													+	○						○		
前畑2号住居	大隅				?									○	○						○		
前畑2号掘立柱建物	大隅														○						○		
前畑遺跡III層	大隅				○										○								
上野原住居	大隅														○			○					
樋田1号住居	日向				○													○					[谷口,1990]
新田原6号住居	日向														○			○			○		
新田原4号住居	日向														○			○			○		
堂地東 SA12住居	日向				○										?			○			○		
上ノ原 T2-4住居	日向									?								○			○		
高付遺跡	大隅														+	○					+	○	
松木薗1号住居	薩摩西部				○					○					○								
松木薗4号住居	薩摩西部									○					○								
松木薗V字溝	薩摩西部					○											○					○	

＋は同系統の前後する型式が出土しているとき，主体をなさないと判断できるもの。

IV　まとめ

以上の検討結果から，表１のように段階を設定することが可能である．

「調整案」では，広島市の中山貝塚と福岡県古賀町の鹿部東町遺跡で，須玖Ｉ式と中山IV式（第III様式）とが共伴したこと［小田，1979］も根拠として，須玖式が第III様式併行とされている．「調整案」では須玖II式の直接の共伴関係は示されておらず，第IV様式も九州の土器との共伴が示されていない．したがって，須玖II式が第IV様式に併行する可能性は十分考えられるのである．

九州内部での併行関係の検討は，結果として「遅れて伝播モデル」を否定することになった．しかし，修正後の現時点でながめなおしても，なお「保守的」であったり「遅れて伝播」したように見受けられる要素があることは否定できない．「遅れて伝播」という言葉が単にその様なありさまを言い当てるものであればよいのであるが，しかし，それをもとに共伴関係をも無視するような傾斜編年を組むわけにはいかないことはもはや納得されよう．

その一方で器種や文様要素などにパラレルな動きがあることも見逃すわけにはいかない．したがって，九州の中期土器群を「連動変化」するものと捉えなおしたほうがよいであろう．

おわりに

九州内での併行関係については，60年代からの支配的な意見に対して，全体を見直す動きはなかなか起こらなかったが，実際には各地で実情に即して対処されてきたともいえる．本論では結局のところ総合して大きく整理し直したことになる．九州と瀬戸内地域との併行関係については「調整案」の一部を修正することになった．しかし，地域間の比較のために共通のステージを設けようとする「調整案」の精神は学史的にみても重要なものであり，継承されるべきと思っている．ここでの分析は大ざっぱで強引なところもあると思うが，このような再検討が進むことにつながれば望外の幸せである．

〔付記〕

本論は基本的には1986年度に提出した卒業論文がベースとなっており，文章的には1988〜89年までにまとめたものを再構成したものである．それ以後今日に至る知見に照らしても大きく変更をせまるものはなく，ますます支持するような証拠が出てきているようである．

個人的コミュニケーションによれば、石川氏をはじめここでふれた方の中には、かつてのお考えに必ずしも固執されず、むしろ積極的に新しいご意見をお持ちになっている方もおられるようである．再検討への気運は高まりつつあることを付言しておきたい．

なお，詳細な統計分析を含む型式学的な分析等は膨大な紙数を要するので割愛せざるを得なかった．別稿を用意しているのでお許し願いたい．

文献

第20回研究集会事務局編，1987：弥生時代の青銅器とその共伴関係，埋蔵文化財研究会第20回研究集会の記録．古文化談叢，17．

橋口達也，1979：九州の弥生土器．世界陶磁全集，1．小学館．

————，1985：南筑後における甕棺の編年，権現塚北遺跡．瀬高町教育委員会．

本田道輝，1984：松木薗1号住居址出土土器とその意義，松木薗式土器の系譜をめぐって．鹿大史学，32．

井上裕弘，1981：弥生時代の遺構と遺物について，金山遺跡．夜須町教育委員会．

石川悦雄，1984：宮崎平野における弥生土器編年試案，素描(Mk. II)．宮崎考古，9．

石川悦雄編，1986：新田原遺跡・瀬戸口遺跡・蔵園地下式横穴墓．新富町教育委員会．

片岡宏二，1982：弥生時代中期の土器編年について，特に三国丘陵の資料を中心に．大板井遺跡II．小郡市教育委員会．

————，1985：弥生時代後期の土器編年について，特に三国丘陵の資料を中心に．三沢栗原遺跡III・IV．小郡市教育委員会．

河口貞徳，1951：一の宮遺蹟報告．考古学雑誌，37(4)．

————，1976：入来遺跡，鹿児島考古，11．

————，1981：新南九州弥生土器集成．鹿児島考古，15．

川述昭人，1986：瀬高地区遺跡・長延1〜3号墳．福岡県教育委員会．

清田純一，1991：肥後における弥生時代遺跡の一様相，城南町宮地丘陵の弥生遺跡について．交流の考古学，肥後考古，8．

森貞次郎，1966：九州．日本の考古学，3．河出書房新社．

長友良典編，1988：宮崎学園都市遺跡発掘調査報告書，4．宮崎県教育委員会．

長津宗重，1986：弥生時代後期〜古墳時代初頭の土器編年表．国富町文化財調査資料，4．国富町教育委員会．

中村耕治，1986：弥生時代，櫛描文土器・瀬戸内系土器のありかたと時期について．鹿児島考古，20．
中村直子，1987：成川式土器再考．鹿大考古，6．
中村友博，1993：柳田式の壺形土器．古文化談叢，30上．
中園　聡，1985：鹿児島県中町馬場遺跡をめぐる諸問題．（九州史学会大会での発表）
————，1986：弥生土器について．鹿児島大学郡元団地内遺跡(J・7地点)．鹿児島大学理学部・鹿児島大学法文学部考古学研究室．
————，1990：土器様式の構造とレベル，九州における弥生時代中期土器を主な素材として．第4回九州一釜山考古学合同研究会．
————，1993：様式論と南部九州の弥生時代中期土器．鹿児島考古，27．
日本考古学協会編，1989：シンポジウム青銅器の生産・終末期古墳の諸問題．学生社．
西健一郎，1983：黒髪式土器の基礎的研究．古文化談叢，12．
小田富士雄，1973：入門講座弥生土器－九州－．考古学ジャーナル，83他．
(————，1983：弥生土器Ⅰ．ニュー・サイエンス社に収録)
————，1979：北九州と西部瀬戸内における弥生土器編年．高地性集落跡の研究，資料篇．学生社．
小田富士雄・佐原　眞，1979：北九州と畿内の弥生土器編年の調整．高地性集落跡の研究，資料篇．学生社．
緒方　勉，1978：黒髪式土器雑考，甕形土器の底部変化をもとにして，谷頭遺跡．谷頭遺跡調査団．
————編，1986：神水遺跡Ⅱ．熊本県教育委員会．
大城康雄編，1986：神水遺跡発掘調査報告書．熊本市教育委員会．
関　晴彦編，1977：九州縦貫自動車道関係埋蔵文化財調査報告，XIV．福岡県教育委員会．
下條信行，1989：刊行にあたって．古代史復元，4．
杉山富雄編，1986：板付周辺遺跡報告書，11．福岡市教育委員会．
高倉洋彰編，1973：鹿部東町遺跡．日本住宅公団．
————，1982：原ノ辻上層式の検討．森貞次郎博士古稀記念古文化論集，上．
竹田宏司編，1993：神水遺跡Ⅱ．熊本市教育委員会．
武末純一，1982：北九州における弥生時代の複合口縁壺．森貞次郎博士古稀記念古文化論集，上．
————，1987：須玖式土器，弥生文化の研究，4．雄山閣．
谷口武範編，1990：県営圃場整備事業（坪谷川地区）に伴う発掘調査概要報告書，樋田遺跡．東郷町教育委員会．
田崎博之，1985：須玖式土器の再検討．史淵，122．
立神次郎，1985：王子遺跡．鹿児島県教育委員会．
豊岡卓之，1985：畿内第Ⅴ様式暦年代の試み．古代学研究，108・109．

————，1989：弥生・動乱の時代，吉野ケ里遺跡の同時代史．橿原考古学研究所附属博物館特別展図録，32．橿原考古学研究所．
山中悦雄，1983：宮崎平野における弥生土器編年試案，宮崎県総合博物館研究紀要，8．
柳田康雄，1983：伊都国の考古学，対外交渉のはじまり．大宰府古文化論叢．
————，1987：高三潴式と西新町式土器．弥生文化の研究，4．雄山閣．
吉永　明編，1989：下堀切遺跡II．八代市教育委員会．

挿図出典：図1［関編，1977］，図2［川述，1986］，図3［吉永編，1989］，図4［長友編，1988］，図5［筆者測］，図6［本田，1984］，図7［石川，1986］，図8［立神，1985］，図9［河口，1951］，図10［杉山編，1986］